

2021年10月10日 礼拝説教要旨
詩編講解説教81「思いがけない言葉」
詩編81：6b～15、ローマ5：8～11

過越の祭や仮庵の祭など、ユダヤ人は祭をととても重んじております。第81編には収穫を祝う祭が背景にあると考えられています。今、実りの秋を迎えておりますが、信仰者にとって実りとは何でしょうか。わたしたちは神さまを信じることに際して実際に魂の救いを実りとしていただきます。しかし、しばしばその実りを実感することができないのです。この世の現実には目を遮られ、神さまの救いを見失ってしまう。自分は果たして救われているのだろうかと思慮することがあります。でもそれは現代人のわたしたちだけのことではありません。ユダヤ人も同じでした。彼らは絶えずアッシリアやバビロニアといった強国の脅威にさらされておりました。そのような苦難の中で救いを見失う、信仰が揺らぐことがありました。それゆえ祭は神さまの救いの実りを思い起こし、前に歩み出すために必要不可欠なものだったのです。

今日のところを注意して見ていただくと、7～15節のところは鉤括弧になっています。ここは神さまからの直接的な語りかけの部分になっています。何より祭においてイスラエルの人々は神さまの言葉を聞きました。その神さまの言葉について「わたしは思いがけない言葉を聞くことになった」（6節後半）とあります。ここは直訳しますと、「わたしはわたしが知らない言葉を聞く」となります。神さまの言葉はわたしたちがこれまで聞いたことがないような言葉なのです。

宗教改革以後、プロテスタント教会は説教を礼拝の中心にしました。その時にこういうことが言われました。「神の言葉の説教はすなわち神の言葉である」これは牧師を神格化しているのではありません。牧師が聖霊に導かれ御言葉を説教する時、その言葉は神さまの言葉なのだということです。会衆も聖霊に導かれ信仰をもって説教を聞く時に、その言葉は神さまの言葉になるのです。わたしたちはそのことを信じて祈りつつ、説教を語り、説教を聞きます。実はここではそういう特殊なことが行われています。

初めて教会に来られた方、礼拝に出席された方が、どのように説教を聞かれているのかが牧師として気になります。こういう言い方をすると失礼かもしれませんが、おそらく最初は何を言っているのか分からないのではないかと思います。もちろん言語、日本語としては分かるでしょう。しかし初めて聞くような体験をしていると思います。それは神さまの言葉だからです。普段、わたしたちが話している言葉は人間の言葉です。日常の会話も、学校で先生が教えてくれる言葉も、ニュースの言葉も全て人間の言葉です。その人間の言葉にわたしたちの耳は慣れていきます。けれども教会では神さまの言葉を聞くのです。それはわたしたちの言葉とは異質な言葉だと言わなければなりません。それは初めて聞くような「思いがけない言葉」なのです。

そしてその言葉の内容も思いがけない内容となります。「わたしが、彼の肩の重荷を除き、籠を手から取り去る。わたしは苦難の中から呼び求めるあなたを救い、雷鳴に隠れてあなたに答え、メリバの水のほとりであなたを試した」（7～8節）ここでは出エジプトの出来事が語られています。「肩の重荷」「籠」これはエジプトでの重労働を示します。その苦しみ、痛みを神さまはご存知になられ、イスラエルをエジプトから救い出されました。さらに「わたしの民よ、聞け、あなたに定めを授ける」（9節）この「定め」とは、生きる指針として神さまが与えられた十戒

のことです。「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」(出エジプト20:2~3) この十戒の冒頭の御言葉がこの詩編にも反映されています。そのように神さまはイスラエルをエジプトから救い出され、さらには神さまの戒めである十戒を与えて彼らを導き養われます。

ここに「聞く」という言葉が繰り返されます。「わたしの民よ、聞け」「イスラエルよ、わたしに聞き従え」(9節)「口を広く開けよ、わたしはそれ(御言葉)を満たそう」(11節)ともあります。御言葉を食べる。人間が生きるために毎日の食事が欠かせないように、御言葉に養われてこそわたしたちは真に生きることができます。主イエスも「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きる」(申命記8:3)とされました。その主の口から出る御言葉こそ、命のパンであるイエス・キリストに他なりません。このキリストという御言葉をわたしたちは礼拝でいただくのです。それが生きる力、原動力になります。

ところがこの命の御言葉をイスラエルの民は聞かなくなります。「しかし、わたしの民はわたしの声を聞かず、イスラエルはわたしを求めなかった。わたしは頑な心の彼らを突き放し、思いのままに歩かせた」(12~13節)ここに人間の罪が指摘されます。神さまに背き、御言葉を聞かず、自分勝手に生きる。「頑な心」「思いのまま」わたしたちはそうやって生きているでしょう。結局、我を通すだけなのです。だから衝突するし、赦しがたい。そういう殺伐とした現実を抱えて日々わたしたちは悩むのではないのでしょうか。

けれども、そのイスラエルの民を神さまは忍耐をもって導かれ、約束の地カナンに導き入れました。ここに最大の思いがけないことがあります。神さまはこの頑な民を見捨てられないのです。どうしてでしょう。神さまはこの民の頑な心を打ち砕くために何をされたのか。イエス・キリストを与えてくださいました。思いのままに生きる民を見捨てない代わりに、キリストが見捨てられたのです。この頑な心を打ち砕くために、キリストがわたしたちに代わって十字架で打ち砕かれたのです。これが思いがけない言葉でなくて何でしょう。

この恵みの言葉を聞く時に、わたしたちの心にわき起こるものが感謝です。喜びです。そして愛です。ルターは愛を「甘美な感情」と言いました。「わたしは岩から蜜を滴らせて、あなたを飽かせるであろう」(17節)「岩から蜜を滴らせ」それは蜜のように甘く、心地よいものです。甘いものを食べると元気が出るように、わたしたちは御言葉に養われて、愛を取り戻し、自分だけではなく、人をも愛し生かすように導かれるのです。それが信仰の実りです。パウロも「霊の結ぶ実(は)は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です」(ガラテヤ5:22~23)と述べています。その実りを実感するときこそ、わたしたちにとっての祝祭日、この日曜日の礼拝なのです。